2020 for September 秋 Vol. 9

会報 安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

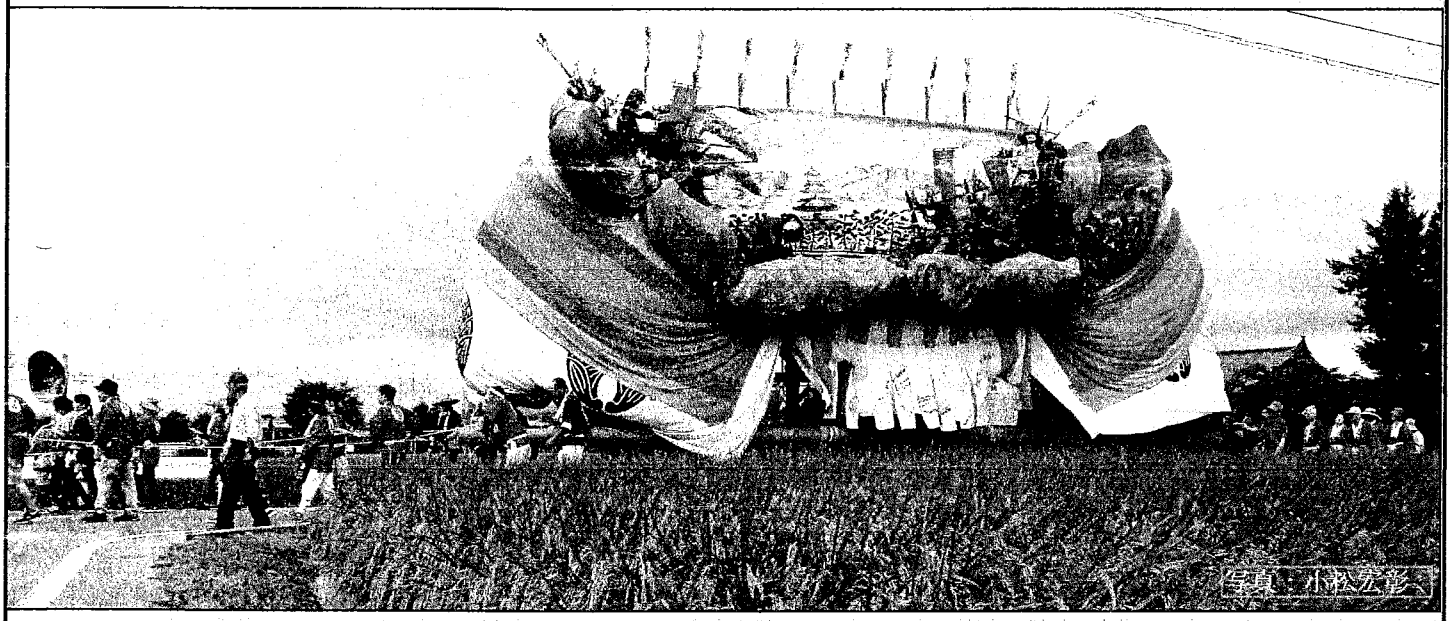
1 安曇平の古代史の厚い扉を開こう・・丸山祐之

2 会長交代のご挨拶・・・・・・・・・金井　恂

3 安曇族に繋がる匂いに期待して・・・平林厚美
安曇郡と筑摩郡の境　古梓川・・・・有賀裕司
新たな一歩を踏み出そう・・・第10回総会報告

4 町村史を裸にすることから始めよう・川﨑克之
歴史の専門用語と格闘中・・・・・・丸山祐之
博多どんたく港まつりに参加して・・千国寛一
編集後記・・・・・・・・・・・・・・本郷敏行

発行:安曇誕生の系譜を探る会　発行責任者:丸山祐之 編集委員長:本郷敏行 事務局長:川﨑克之〒399-7102 安曇野市明科中川手1177－3



安曇野の古代史の厚い扉を開こう　会長 丸山祐之

旧南安曇郡4町村と東筑摩郡旧明科町の５町村が合併し安曇野市がスタートした直後、数人の有志が思い立ち「安曇誕生の系譜を探る会」を発足させ、多くのメンバー参集のもと活動を始めてから、早や10年を迎えようとしています。旧5町村の共通のテーマとなりうる安曇野市（地域）の古代史を学ぶ場を提供し、安曇野市民の新たな交流が促進されればとの想いも達成されてきたように感じております。“安曇”という言葉に魅せられ参加された方も多いのではないかと思います。発足当時から試行錯誤を重ね、様々な調査、研究、講演会等、また会員相互の意見交換を通して改めて学ぶことが多かったのではないでしょうか。

さて、私、本年4月23日の第10回総会において、金井恂さんの後任として会長に選ばれました。金井さんには会の発足当初から会長として会をリードして頂き感謝しております。最も適任である金井さんが会長を退かれることは誠に残念ではありますが、諸般の事情もあり、会員の皆様にはご了解いただきたく思います。これからも一会員として引き続き会の中心的役割を果たしていただきたいと思います。長い間ご苦労様でございました。

全くの想定外で私が会長を任されましたが、力不足は否めず、副会長、事務局、また会員の皆様のご協力のもと会の運営に当たりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

全国的にも、また長野県内でも近年新たな遺跡、遺物の発見に沸いておりますが、考古資料（考古学）、文献資料（文献史学）また民俗資料（民俗学）等の乏しいこの安曇野地域では、この地域がどのような経過をたどって成立してきたのかという古代の歴史を探求することは極めて困難です。この難しさは古代史の究明作業に共通する問題ではありますが、前述しましたような発掘調査が安曇野地域ではあまり進んでいないことが一因だと思っております。今後に期待するところです。

この中で合併時に旧明科町から大きなお土産がプレゼントされました。それは明科廃寺の案件です。県内では、北信、東信などでは大規模な遺跡が発見され、ある程度の権力や財力の集中が想定されています。しかし、現在までのところ安曇野地域、中信にはこのような大きな基盤は確認されていません。明科廃寺が突破口になり安曇野の古代史に何かが起きる、そんな予感がしているのは私だけではないと思います。

安曇野の厚く重い古代史の扉を会員の皆様とともに、楽しみながら押し開けて行きたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

会長交代のごあいさつと 今年度の取り組み課題について ・・・・・金 井 恂

安曇誕生の系譜を探る会は平成20年に発足し、今年は9年目に入ります。現在でも90名という多くの会員が参加してさまざまな活動を活発に進めています。これまでの活動の中で、郷土の古代史に興味をもつ人々が多いことを知りました。それは安曇野市の人々ばかりでなく全国各地の人々に共通する想いです。郷土の古代史を探ると言うテーマは現代に生きる人々が期待するものであり、とても有意義なものであると考えます。

私はこれまで会長として努めさせて頂き、会の活動に私なりに寄与できたと思っております。それは会員を始め多くの皆様方のご支援とご協力の賜物と思い、感謝しております。一方、私は横浜市在住ということもあり、会員の皆さんと身近に懇談したり親しく交遊したりする機会が少なく、心苦しい思いをしていました。それで私は会長を辞任し、丸山祐之さんに新会長をお願いすることにし、4月の総会でご承認頂きました。今後は丸山新会長を先頭にして、活発にかつ楽しい会として活動して行って頂きたいと願っております。なお、私は今後も会員として会の活動にはできるだけ多く参加しようと考えています。

会は、自分たちの郷土である安曇郡の古代史を勉強することを目的としています。安曇郡の「安曇」は「安曇氏族」の名前をもって名付けられたとされています。安曇郡は何時の時代に建郡されたのか、そのとき安曇氏族はどのように関わったのかというテーマです。

安曇平は北アルプスの麓に広がる扇状地帯であり、古代においては農業用水の乏しい地域でした。そのような地域に、水稲栽培に基づく弥生文化がいつ、どのように築かれたのか、開拓した人々はどのような人々だったのかということです。安曇氏族は海人族ともいわれ、海辺に生きる民と言われていますが、海とは無縁の山国である信濃国安曇郡へ進出してきたということは不思議というか、歴史ロマンに満ちた深い謎です。安曇氏族とはなにか、そしていつ、どのようにして安曇郡へ進出してきたのかということは興味深いテーマです。

このテーマは自分たちの祖先のルーツを探ることであり、学問上の課題というよりも安曇野市民にとっての課題なのです。会は市民サークルであり、門前の小僧や素人の集まりですが、多くの学者・研究者たちの話をよく聞きながら、自分でも考え、そして自分からも発言し、みんなでワイワイガヤガヤ活発に論議し、そして自由で斬新な切り口から新たな仮説を構築するということが会の考え方です。

安曇の古代史を解く鍵は二つあります。一つは安曇という古代氏族の実体を明らかにすることです。これまでに氏族部会を設けて勉強し、また安曇氏族ゆかりの地との交流を通じて各地の状況や全国の綿津見神社の由来を調べてきました。それらについては「安曇氏族の興亡そして鎮魂」(仮称)としてまとめ、近々に皆さんにたたき台として提供したいと考えています。

二つ目は安曇平の開拓の歴史を明らかにすることです。これまで、歴史部会という部会を設けて活動してきましたが、今後さらに発展させる必要があります。安曇平全体を視野に入れ、郷土史研究者たちや考古学研究者たちのこれまでの研究成果等を基にして安曇平全体の古代史を考えることが必要です。そこで、本年度から長期的な研究課題として、「新たな視点で安曇野の古代史を総合的に学び直す」というテーマに取り組むことにしました。これは4月の総会で今年度活動計画として承認されたことです。

「安曇平全域について、これまでに知られている縄文・弥生・古墳時代の古代史を収集し、地域別・時代別に考察する。着目点は弥生文化の進出時代、開拓の進捗状況、安曇氏の進出時代、安曇郡設立時代、古墳築造時代の住民の状況とし、地域間の比較検証を行う。全体として整合性のとれた安曇郡古代史の構築を目指す。」というものです。

まず地域ごとに調査グループを編成し、町村史等に基づき、地域の古代史を勉強し、要点を整理します。次の段階として、それらの地域別の調査結果を集め、全体として比較研究して、安曇平全体の古代史を構築することを目指すものです。

これは一見難しそうに見えますが、十分に達成可能なことです。私たちは市民サークルとして勉強会活動をしているに過ぎないけれども、地域ごとの町村史や歴史専門書等を勉強し、そこで語られている古代史を理解することはできます。そして地域ごとに語られている古代史を安曇平全体において比較研究することもできます。そうすると、安曇平全体での整合性のとれた古代史を構築することが可能と考えられます。

それはアマチュアだからできることであり、同時にアマチュアの安曇古代史にすぎないともいえます。しかしそれは安曇平全域という視点に立つものであり、専門研究者たちに対する問題提起となると考えます。それが安曇の古代史を見直すきっかけになることを期待したいのです。会員の皆さんには全員が奮ってご参加いただきたいと願っております。

新たな視点で安曇野の古代史を総合的に学び直す

地域別研究調査班への参加のお勧め

平成28年度の総会において、今年度の活動計画のメイン事業として、新たな視点で安曇野の古代史を総合的に学び直すべく、安曇平の地域別に研究・調査グループを編成して進めることが決まりました。

この活動は、できるだけ多くの方に参加していただいて進めることにしております。会員の方々には、少なくとも居住地のグループに参加していただきたいと考えています。なお他地域のグループに重複して参加することも可能です。

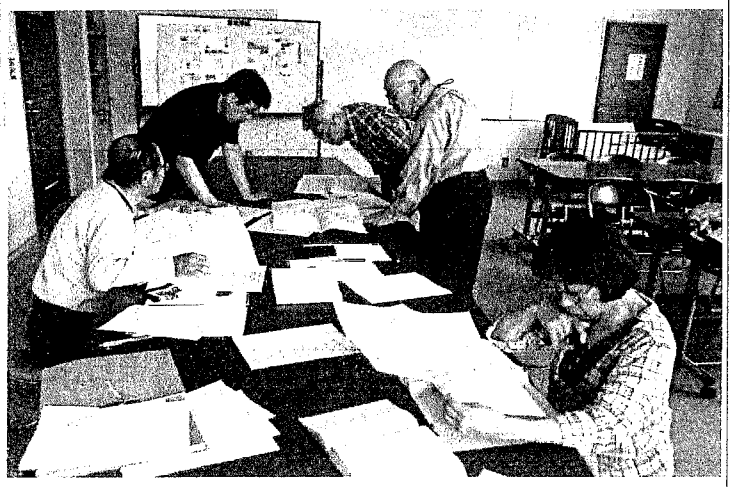
1班（大町・白馬・小谷）、2班（明科・池田・松川）、3班（穂高・堀金）、4班（豊科・三郷）、5班（松本）

＊参加希望の方は事務局までご連絡ください。

事務局：川﨑携帯　090-5779-5058

地域別調査研究班の取組み

安曇族に繋がる匂いに期待して



担当地域は、北安曇郡小谷村・白馬村および大町市6地域（平、大町、常盤、社、美麻、八坂）になります。現在参加者は6名（本郷、金井、千国、平瀬、堀金の各氏と世話人平林）で三地域を分担しています。５月にキックオフミーティングを行ない、その後月一回の開催で場所は新穂高支所西の市民活動サポートセンター（愛称：くるりん広場）を利用しています。

北安曇は山深い僻遠の地で、分水嶺となる佐野坂から流れ出る姫川は、昔ヌナ川とも呼ばれていました。大雨が降るとヒメとは似つかわしくない顔になりました。そのため、縄文時代に遡る古代から受け継がれてきた千国古道は、現在の姫川の東側に位置する峠の道で、ヒスイ、黒曜石、塩が行き交う官道（当時御坂峠道）でした。峠一つに地蔵峠がありますが、龍宮の地蔵との説明があります。何か匂いそうな気配が！

糸魚川に接する戸土（とど）地域では日本海が望めます。近くに存在する神社は、諏訪大社御柱祭りの前年に執り行われる薙ぎ鎌打ち神事の舞台となっています。小谷村の神社はすべて諏訪神社です。

白馬村にある縄文時代や中世などの遺構から、当時の人は水害などの影響を防ぐなど、断層地形を暮らしに生かしていたようです。大町市海の口の遺跡では、縄文時代ヒスイの加工が行われていたことがわかっています。安曇族に繋がる匂いを期待しつつ活動をして行きます。

大町・白馬・小谷地域調査研究班　　平林厚美

安曇郡と筑摩郡の境 古梓川（こあづさがわ）と 呼ばれた榑木川（くれきがわ）とは？

倭橋（やまとばし）付近から東へ現在の松本市新村・島立・島内地区経由で奈良井川に至る榑木川（くれきがわ）が古代梓川の本流で安曇郡と筑摩郡との境を成し松本平西部の扇状地を形成していた。

古代この扇状地にはデルタ地帯のように大小無数の梓川支流が広がり、中洲が「島」のように見えたため現在の島内・島立・島高松・松島・青島などの地名の由来となったそうです。

室町時代以前、梓川の流れは宮渕付近で奈良井川と合流し、すぐ近くには東から田川も合流していたため、この付近からの氾濫が絶えなかったようです。

松本市島内山田地区の伝承によれば山頂付近に立地する「山田の一本松」がある。この松は、古老から言い伝えられてきた話では、大切な役目を果たしたそうだ。眼下に見える梓川は、昔は暴れ川で、大雨が降ると川が氾濫して堤防を壊して周りの田畑を流してしまい、東筑摩郡島内村と南安曇郡高家村との境界が解らなくなり、両村は境界争いの揉め事ばかりしていたそうです。そこで関係者が協議をして、梓川上流の倭橋から山田のこの松を見通した直線を両村の境界とすることに決め、その後は争いが無くなったと言われています。

松本地域調査研究班　有賀裕司

新たな一歩を踏み出そう！　＝ 役員改選と地域別研究会の推進 ＝

第10回総会において平成28年度活動計画を下記の通り決定し、役員の改選が行われました。

＜主要事業＞

課題研究（勉強会）

テーマ別グループが設定した課題に取り組む

１、新たな視点で安曇野の古代史を総合的に学び直す。

２、「安曇の古代＝仁科濫觴記考」の勉強会の継続

３、個別テーマの研究発表会の機会を設ける。

地域への発信・交流

講演会を年2回開催するほか、会報「安曇人」を年2回発行、郷土博物館との連携を強化。

会　長：丸山祐之
副会長：松尾宏　金井透
事務局長：川﨑克之
事務局次長：古川幸男　浅川隆
会　計：平瀬孝子
監　事：池上勝三　千国寛一
幹　事：金井恂　本郷敏行　平林厚美　濱昭次
小林幹胖　有賀裕司　小穴金三郎　小松宏彰
津留芳子　倉科武久　（順不同）

町村史を裸にすることから始めよう

私たちの研究班の担当地域は、古代に安曇氏(族)が存在した唯一の物証である正倉院の布袴を産した前科郷と考えられている池田町と旧明科町、そして安曇族の根拠地だったとの説がある松川村ということで、自ずと安曇氏の影を求めてとなりがちですが、まずは地道に各町村の原始・古代史を学び直し比較考証から始めるということになりました。

しかし考古学から見た場合、いずれの地域も必ずしも恵まれた環境にあるとは言えません。山崩れや河川の氾濫などの自然災害、そして戦後の開発や客土事業によって多くの遺跡や遺物が失われてしまいました。

町村史の執筆者の方々のご苦労も、無から有を産み出す以上のものがあったように思われます。通説や一般論に寄りかかった記述にそれが窺えます。また執筆者が他の町村史編纂を兼務するということもあってか、町村名を替えて、以下同文というような記述も目立ち、それぞれの町村の特徴や独自性を表したものになっていない傾向があります。

私たちは、まず一般論や通説による予定調和的な解釈を検証して、こうした町村史を一度裸にしてから組み立て直す、そんな意気込みで取り組もうとしています。

明科・池田・松川地域調査研究班　川﨑克之

歴史の専門用語と格闘中！

現在6名の参加を得て活動しています。豊科町誌及び三郷村誌を中心に勉強中です。縄文～弥生、また古墳時代にかけては、あらためてこの地域には考古関連の資料が乏しいように感じております。また、両町村史を読み進めて行く中で、専門用語の読みや、その意味と格闘しながらの勉強会です。他の地域は如何でしょうか。

調査研究の結果報告は別の機会に譲りますが、次の奈良―平安時代に進むためには一度整理しておくことは重要な事だと思いつつまとめています。上記町村史以外にもこの二地域に関する資料等もあれば付け加えて行きたいと思います。

豊科・三郷地域調査研究班　丸山祐之

博多どんたく港まつりに参加して

平成28年5月2日～4日にかけて、博多どんたく港まつりに参加しました。安曇野市から参加者17名中、当会員は4名(金井恂・金井邦子・丸山祐之・千国寛一)でした。JR松本駅を6:50に出発し、名古屋から新幹線で博多駅に12:54に到着しました。

初日の午後「志賀海神社」を全員で参拝した後、島をバスで一周しました。金印公園は工事中のため、残念ながら入ることができませんでした。夕食は中洲で東区の区長はじめ幹部職員と交流会を行いました。

翌朝我々4名は別行動をとり、大川市の風浪宮「阿曇史久宮司」を訪ねました。1800年前に創建された風浪宮は海神三神を主祭神としてお祀りし、阿曇連磯良丸命を初代神官とした阿曇氏が奉斎する神社です。

毎年旧暦4月1日の大潮の日に神職を乗せた船が有明海へ向かい、潮が引いている間に沖の干潟で行われる沖詣り海神祭があるとのことです。海上で船を3回廻すところは穂高神社のお船まつりと似ているとの話がありました。 午後は激しい風雨のため、博多どんたくパレードは中止となってしまいました。我々一行は安曇野市PRのため、天神のメイン会場のどんたく広場へ向かいました。宮澤市長と濵市議会議長が挨拶した後、全員で安曇野産のリンゴジュースとパンフレットを観客に配り安曇野市の宣伝をしました。

夕方から我々4名は香稚駅前で志賀島歴史研究会の坂本・木梨・松田の各氏と相島歴史の会の篠崎ご夫妻と食事をしながら交流を図りました。

夫々の皆さんが安曇族に関した勉強を重ねており、志賀島では本年サミットを開催したい意向でした。再びお逢いできることを楽しみにしながら散会しました。

千国寛一

編集後記 世界最大のスポーツの祭典・リオ五輪が閉幕した。猛暑だった今夏、リオ五輪と高校野球で何とかしのぎ切った人も多かろうと思う。祭りの後の何とやらではないが人類には厳しい課題が数多く立ちはだかっている。

とりわけ「核問題、地球温暖化問題、テロ対策」は人類の存続に関わる大問題である。

「人類の歴史とは戦争の歴史である」という言葉がある。もっといえば種族間の生存競争ではないか。核といい、温暖化といい、テロといい、いくら会議をやっても会議は踊るでいっこうに進展しない。まさに自国のの生き残りをかけた戦いではないか。人類の叡智は何処へ行ってしまったのか。ドイツのヴァイツゼッカー氏の「荒れ野の40年」の言葉は彼の死後30年の時を経て現メルケル首相によって世界の指導者の心を揺るがせたとの事である。「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも盲目となります」というフレーズは人々の心に響いた。我々も歴史を学ぶ者として幅広い視野で過去を見なければならないと思う。我々の目的は過去を学ぶだけではないということは言うまでもない。　編集委員長　本郷敏行